九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

子宝祈願の遺産 ： ブルターニュ公継承問題をめぐって

田辺, めぐみ
帝塚山学院大学 ： 非常勤講師

https://doi.org/10.15017/1495145

出版情報：Stella. 33, pp.159-174, 2014-12-24. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン：
権利関係：

子宝祈願の遺産*)

――ブルターニュ公継承問題をめぐって――

田　辺　めぐみ

はじめに

中世末期に多くの婦女子が所有した時祷書は，当時の女性の社会的立場や境遇を知るための貴重な史料とされてきた。とはいえ，注文主が父や兄そして夫などの男性である場合も多かったという事実を考慮すれば，写本に認められる「女性性」が現実の姿を再現しているのか，もしくはあるべき理想像を示しているのか，その判別が容易ではないことも事実である[1)]。いっぽう男性が注文・所有した時祷書にはそういった異性の影響は及ばなかったにもかかわらず，今日まで特徴や特異性が「男性性」の観点から考察されることはなかった。男性の時祷書はもっぱら絵師の独創性，もしくは個人的な事情や立場といった写本の制作背景を知るよすがとされてきたのである。しかしながら，男女の役割や各々のありように歴然とした性差があった当時の状況を勘案するならば，各写本に男性特有の思考・志向が反映されている蓋然性は高いと言えよう。特に世継ぎの出産が女性に特化した責務と見なされていた時代だっただけに，男性の時祷書に登場する子宝祈念の表象について，「男性性」という性差を視野に入れつつ検討する意義は十分にある。

本稿では，写本の注文主・当初所有主の痕跡が多数収載されている『ピエール２世の時祷書』の彩飾プログラムを以上の見地から再検証し，時祷書を対象としたジェンダー研究のために新たな視角の提示を試みる。

図像・装飾プログラムの聖と俗

本題に入る前に，『ピエール２世の時祷書』の制作経緯にかんする既知の事項を整理しておこう。同書は 1450 年から７年間ブルターニュ公国を治めたピエール２世（1418–1457）が注文し，所持した写本であることが様々な側面から立証

されている[2)]。まず主要な構成要素をなす「聖母マリアの時祷」や「死者の聖務日課」の祈祷文が，公の居住地ナントの典礼使用式である事実が先行研究によって確認された。根拠は，「教会暦」「執り成しの祈祷」「連祷」にナントで崇敬を集めた諸聖人が散見する点にも求められている[3)]。ほかにも，半頁大の50ものミニアチュールや豪華な余白装飾と他のナント使用式の写本との類似性が，エバーハルト・ケーニヒによって指摘されている[4)]。いっぽう写本所有主の特定につながる手がかりは，中古フランス語で記された各種テキスト，欄外装飾に頻出する紋章，さらに祈祷像を始めとした多彩な装飾・図像などに見出せる[5)]。

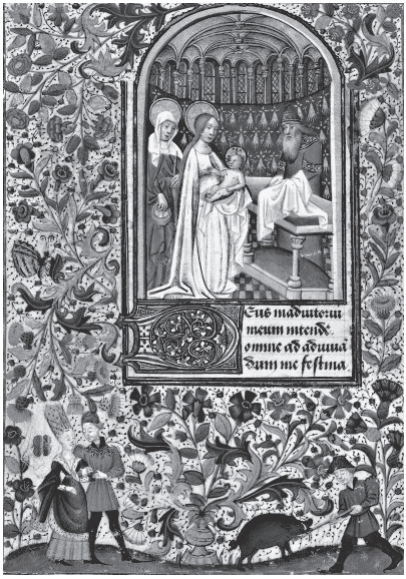
とくに重要なのはピエール2世の心性をほのめかす祈祷像だ〔**図版1**〕。クリスティアン・ド・メランドルは，冠を被り，高価なアーミンに裏打ちされた赤いコートを纏い，神に祈りを捧げる公の姿がダヴィデの祈祷像に酷似している点に着目し，ここに彼のフランス王家への対抗心を読み取っている[6)]。篤信の統治者として名高い第2代イスラエル王ダヴィデに擬えて自らの姿を描かせる流儀は，たしかにフランス王家に長く続いた伝統である[7)]。しかも祈祷姿のピエールには祝福のジェストをする神から黄金の放射光が燦然と放たれ，欄外には冠を戴く公の紋章が天使に抱かれていることから，この構図が神との深遠な関係を誇示するフランス王家の慣例を踏襲しているのは疑えない[8)]。

こうした作意を顧慮するならば，「神殿奉献」〔**図版2**〕の図像プログラムに隠された意図を読み解くことも可能となろう。図像の典拠となった福音書記者ルカ2章22節以下によれば，聖母マリアとヨセフは清めの期間が過ぎると幼子を連れてエルサレムへのぼる。すると「救世主に逢うまで死なない」と聖告されていたシメオンが聖霊によってイエスの捧げられる聖殿へと導かれ，聖子を抱いて次のように告げる――

> 主よ，今こそあなたは，あなたのしもべを，みことばどおり，安らかに去らせてくださいます。私の目が，あなたの御救いを見たからです。御救いはあなたが万民の前に備えられたもので，異邦人を照らす啓示の光，御民イスラエルの栄光です。[9)]

イエスこそ待望の救世主であると預言されるこの場面には，神子を抱くマリアと奉納の品を手にした侍女，そして彼女たちと対面する老シメオンの姿が描かれている。だが不可解なのは，ブルターニュ公家の紋章が縫い取られた織物

図版 1　ピエール 2 世
（BnF, ms. lat. 1159. fol. 27 v）



図版 2　「神殿奉献」
（BnF, ms. lat. 1159. f. 65 v）

図版 3　「福音書記者マルコ」
（BnF, ms. lat. 1159. f. 18）

が神殿を装飾している点である。

「神殿奉献」の図像プログラムが喚起するもうひとつの問題は，欄外下に描かれた猪を射止める男と一組の男女，そのどちらの姿にも主題挿絵ならびにテキストとの関連性が見出しにくいところにある。先行研究では，これらのモチーフは単なる「装飾」と見なされ，それぞれの選択意図が問われることはなかった。しかしながら後者の男性の首に前ブルターニュ公フランソワ１世（在位1442–1450）が設立した「穂の騎士団」の首飾りが認められる点に，新たな解釈の手がかりを求めうるのではあるまいか[10)]。というのも，麦の穂が２人の女性によって刈り取られ（fol. 15 r），編まれ（fol. 16 v），首飾りとなって男性の首にかけられる場面〔**図版３**〕が，「４福音書読誦」の各課冒頭に描かれているからである。

メランドルは，麦が豊饒の象徴であると同時にブルターニュの主要生産穀物である点にもとづき，他に類例のない麦穂の首飾りの叙述的図像をブルターニュの繁栄祈念の表象と捉えている[11)]。いっぽうロラン・アブロは男性に麦穂の首飾りをかける女性にピエール２世の妻フランソワーズ・ダンボワーズ（1427–1485）の姿を認めている[12)]。しかし首飾りが授与される場面と同じ衣装を纏った男女は４月の月暦図（fol. 4 r）に描かれているだけでなく，そもそも当月の図像には愛の告白のため花や花冠を手にする男女や婚約式が選択されることが多かった[13)]。これらを考慮すれば，むしろブルターニュ公国の存続を担うフランソワ２世（在位 1458–1488）夫妻と上記の図像プログラムとの関連性を問わずにはいられまい。

たしかにフランソワ１世が遺言で命じた娘マルグリット（1443–1469）と従弟フランソワ（1435–1488）との結婚は，公位を継いだ弟のピエール２世立ち会いのもとで 1455 年に挙行された[14)]。この記念すべき年が，写本の制作年代と合致することは注目に値する[15)]。また，新夫婦の誕生が当時のブルターニュ公家にとってこのうえなく重要な出来事であったことも想起すべきだろう。1365 年のゲランドの条約でブルターニュ公国を継承するのは男性に限られていたが，フランソワ１世はイザベル・スチュアート（1427–1494／99）との間に２人の娘しか儲けておらず，ピエール２世にあっては子宝にまったく恵まれなかった。こうした状況下ではフランソワ１世の長女マルグリットとフランソワ，つまり家系を同じくする彼らの結婚は必然であったといえよう[16)]。さらにフランソワ

1世の遺書には，公位継承者として後のアルチュール3世（在位1457-1458）の名も記されていた。後者のドゥヴィーズが猪であるからには，若いカップルに対面する「猪を射止める男性」が誰を指すのかは自明であろう[17]。

欄外装飾の「意味するもの」を考慮したうえで，改めてブルターニュの紋章が施された「神殿奉献」〔図版2〕を再解釈するならば，その図像プログラムにピエール2世の意図を汲まずにはおれまい。すなわち，救世主と預言された幼子イエスにブルターニュ公家が待望する男児を重ね合わせることで，神の民の歴史に公家のそれを擬えようとしたと考えられるのである。たしかにルカの福音書では，大天使ミカエルがマリアに授けられる男児について次のように告げている――

> すぐれた者となり，いと高き子と呼ばれます。また，神である主は彼にその父ダヴィデの王位をお与えになります。彼はとこしえにヤコブの家を治め，その国は終わることはありません。[18]

ただし，このように解釈するばあい，新たな疑問が生じる。ピエール2世から待望の男児に至る神聖な系図を想定するなら，とうぜん系図において妻・母の位置を占めるはずのフランソワーズの存在が，実際には時祷書において稀薄なのである[19]。しかも写本制作の年代を踏まえれば彼女は当時まだ28歳であり，子宝に恵まれる年齢だった。いったいなぜフランソワーズの姿はブルターニュ公家繁栄の祈念表象として描かれなかったのだろうか。

「純潔」の表象から辿るピエール2世夫妻の痕跡

この問いの検討にあたって着目すべきは，「白」によって象徴される〈純潔〉のテーマである。メランドルはフランス王家の紋章をなす「青」が聖人の迫害者をはじめ，負のモチーフに意図的に用いられている側面をとりあげ，これとの対応からブルターニュ公家が崇敬する聖母マリアの着衣に白が選択されたと解釈している[20]。だが，マルグリットが4月の月暦図と麦穂の首飾りの図像〔図版3〕において纏っている衣は白であるのに対し，「神殿奉献」〔図版2〕では青になっていて，婚姻前と後の差異化が認められる。こうした作例を踏まえれば，聖母マリアや諸聖人，世俗の乙女が純白の衣を着た姿で描かれたのも，「純潔」を喚起する色彩の象徴性に配慮したためだと考えられよう[21]。

「純潔」を「白」で象徴する手法との関連で見過ごせないのは，「聖アポロニア」〔図版 4〕の拷問の図像である。『黄金伝説』によれば，純潔で名高きこの聖女は異教徒に暴行され，柱につながれ歯を抜かれてもなお信仰を堅く守り，燃え盛る炎に自ら身を投じたという[22]。注目すべきことに，『ピエール 2 世の時祷書』では「執り成しの祈祷」が捧げられている複数の処女聖人のうち[23]，もはや若くはなかった聖アポロニアのみが純白の着衣姿で描かれているのだ。色彩によって彼女の純潔がことさらに強調されているのである。しかも他のブルターニュ時祷書に描かれている彼女の図像と比較するならば，彼女の局部に獄吏が足を割りいれるという，同書に特有の細部も看過しがたい[24]。

聖アポロニアの図像の着想源を探るうえで手がかりとなるのは，フランス王弟ベリー公が 15 世紀初頭に注文・所有した『ベリー公の美しき時祷書』であろう[25]。こちらの写本には下半身に白布を巻きつけた聖カテリナと聖アガタの局部に獄吏が膝を食い込ませている図像が挿入されており，『ピエール 2 世の時祷書』に共通するコンテクストの存在を窺わせる。たしかに「15 世紀の教会は悪徳への嫌悪を吹き込むことで徳を教えた」と指摘するエミール・マールに従えば[26]，40 歳近く年の離れたジャンヌ・ド・ブーローニュ（1378–1422）を後妻に迎えたベリー公（1340–1416）と，純潔を守る「聖女」を妻にもつピエール 2 世が，共に肉の誘惑にたいする戒めを必要としたことは大いに考えうる。ただし前者の時祷書には若者を誘惑する女性の図像が認められるのに対し[27]，後者のものには「肉欲」や「官能」の擬人像が全く見当たらないため，両者の意思を同列に扱えないことは明白である。

「聖アポロニア」の拷問図に看取しうる特異性が「男性への教示」として捉えきれないとあらば，ブルターニュ公の個人的な事情にもとづいてこれを考察するほかない。彼の妻フランソワーズの生涯にかんしてはかなり詳しい記録が伝わっている。それには，「純潔」を頑なに守るフランソワーズが陰では不貞を犯していると吹聴されて，ピエール 2 世が妻に暴力を振るったとある[28]。彼女の死後およそ半世紀後に書かれた伝承であるため，信憑性は高いとはいえないが，記述内容に照らして「聖アポロニア」の拷問図を改めて検討すれば，他の聖人の殉教図には認められない特徴に目がとまろう。それは純白の衣を纏った処女聖人の口から流れ出る「血」である。このように暴力性を際立たせた表現が導入されたのは，無辜の妻に手をあげた過ちを悔い改めたピエール 2 世が，自ら

図版 4 「聖アポロニア」
（BnF, ms. lat. 1159. f. 151 v）

図版 5 聖母子とピエール 2 世
（BnF, ms. lat. 1159. f. 23）

図版 6 聖アンナ 3 代図
（BnF, ms. lat. 1159. f. 164 v）

に対する戒めとするためであったとは考えられまいか。

ところで，ブルターニュ公の時祷書において「白」が純潔を象徴し，その意味でフランソワーズの存在を連想させるとすれば，彼女と聖母マリアとの関連性についても検証する必要があろう。『ピエール２世の時祷書』には，「聖母マリアの時祷」の各課冒頭のほかにも祈祷文 «Obsecro te»〔図版５〕の冒頭に純白の衣を纏った聖母が描かれている[29)]。聖母子の前に跪く写本所有主の姿を描くことは時祷書に慣例化していたため，単なる聖母崇敬のかたちと見なされがちだが，しかし中世末期には王侯貴族の妻や愛人に似せた聖母像がしばしば表されるようになるのを思い起こそう[30)]。「白」の象徴する純潔によってフランソワーズの存在を強く喚起するのが本書の特色ならば，とうぜん聖母マリアに彼女の姿が重ねあわされていると解釈できよう。さらにここで，「神殿奉献」〔図版２〕で聖母に抱かれる幼子に「誕生を待ち望まれる男児」が仮託されていることを考え合わせるなら，イエスを処女懐胎したマリアのごとく，神の御業により妻の男児懐妊を待ち望む公の密かな願いさえ読みとれるのではないか。この見解は「マギの礼拝」(fol. 61 v) にヨセフが描かれていない点によっても裏づけられる。ブルターニュ公家の繁栄を担う人々が描かれている当該フォリオに，ピエール２世とフランソワーズ・ダンボワーズの姿が不在である理由はもはや言うまでもあるまい。

以上の考察により，『ピエール２世の時祷書』における「公家の繁栄祈念」と「純潔」の表象との結節点を捜し求めるなかで，「男性性」と見なされがちな諸要素が，実際には写本に固有の制作背景にもとづいて巧妙に組みあわされている実態が明らかになったであろう。ただし，多くの時祷書が親族に寄贈・遺贈されていた事実に留意するならば，個人的な祈りのかたちが如何に受容され，転成してゆくのかという問題を今度は検証しなければならない。

変わりゆく子宝祈願のかたち

『ピエール２世の時祷書』の具体的な来歴は，見返しの遊びに記された短文やモノグラムにのみ求めうる。それらにより同写本が16世紀にジャック・ド・フォワスィの妻マルグリット・ド・グルネズィの蔵書となったことが確認できる[31)]。いっぽう写本にはいかなる痕跡もないものの，ピエール２世の従妹で1457年にフォントヴロー修道院長となったマリー・ド・ブルターニュ（1424–

1477）も同写本を所有した可能性が，彼女の蔵書目録にもとづき推測されている[32)]。

先行研究が明示する『ピエール 2 世の時祷書』の来歴は以上にとどまるが，ブルターニュ公家繁栄祈願が託された写本が，公の逝去直後に修道院長となった未亡人マリーに託されたとは考えがたい。むしろ 1457 年にピエール 2 世が他界した後，ブルターニュ公を継いだ叔父のアルチュール 3 世（1393-1458）が時祷書を承継した可能性を問うべきだろう。ただし彼は 3 度の結婚の甲斐なく実子に恵まれず，すでに高齢だったため，子宝祈願の祈祷書の相続者に相応しくないと見なされた蓋然性は高い。この推測は，先述の「神殿奉献」〔**図版 2**〕の図像プログラムに，彼が妻カトリーヌ・ド・リュクサンブールを伴わずに描かれている事実によって裏づけられるであろう。

こうした消去法によって浮上する継承者はマルグリット・ド・ブルターニュにほかならない。彼女が写本を所有した根拠となる痕跡は，「聖アンナへの執り成しの祈祷」冒頭〔**図版 6**〕の，冠を戴いた旗形の紋章である。同形の紋章は，ほかにも聖母子の前に跪くピエール 2 世〔**図版 5**〕，公の祈祷像〔**図版 1**〕，「聖母戴冠」（fol. 74 v）の欄外にも現れるが，それらには白貂の毛皮模様が 11 個散らされているのにたいし，問題の紋章には同様の図柄が計 14 個数えられるのだ。歴代のブルターニュ公が盾や旗形に白貂の毛皮模様を 8 から 11 ほど散らした紋章を使用していたこと，既婚女性の紋章が父と夫の紋章の組み合わせであること，そして紋章に冠が被されていることを勘案するなら，件の紋章は，フランソワ 1 世を父に，そしてフランソワ 2 世を夫に持つマルグリット・ド・ブルターニュの紋章であり，彼女が『ピエール 2 世の時祷書』を一時的に所有していた証拠と見なせるのではあるまいか[33)]。

逝去直前に作成された彼女の遺言書に同写本の記載はないとはいえ[34)]，ブルターニュ公家繁栄のための子宝祈願に用いられた祈祷書が彼女に託された可能性は十分にありうる。だが，こう解釈する場合，「聖アンナ 3 代図」〔**図版 6**〕にのみ挿入された彼女の紋章にいかなる意図が隠されているかを問う必要があろう。問題の紋章はピエール 2 世のそれを単に描き換えたものではなく，写本の継承過程で挿入されたことは，周囲の装飾モチーフの不自然な途切れによって確認できる。また，この主題は従来，聖母マリアが原罪に汚れずに生を受けたことを描くものであるにもかかわらず，彼女の衣に白と青の配色が用いられて

いるため，純白の衣装で描かれている他の聖母像のように「純潔」を表象するものでも，またそこからフランソワーズの姿を喚起せんとするものでもなかったことが窺える。

「聖アンナ３代図」に自らの紋章を付したマルグリットの意図を探る手がかりは，彼女が母イザベル・スチュアートから受け継いだ『フィッツ・ウィリアムの時祷書』に求められる[35]。その継承過程で，聖母子に祈りを捧げるマルグリットの姿が挿入されたという事実に照らすならば，『ピエール２世の時祷書』への紋章の追加は新たな写本所有主を誇示するに留まらず，その聖人崇敬を表象することをも目的にしていたと言えよう[36]。さらに『フィッツ・ウィリアムの時祷書』における聖アンナや聖母子への崇敬表現に子宝祈願の形象を見るエリザベト・レストランジュの解釈に倣うならば，『ピエール２世の時祷書』がマルグリットへと継承される過程で，聖アンナを祖とするキリストの系図に「女性の」子宝祈願の表象が新たに追加されたと見なしうるのである[37]。

結論にかえて――祈念表象の「部分」から「全体」へ――

イスラエル王ダヴィデに擬えつつ神聖なる公国の繁栄を祈念する，いわば「男性的」な子宝祈願が託された『ピエール２世の時祷書』が，女性の継承者によっていかに受容されたかを検討することにより，子宝祈願の表象における性差の実態が明らかとなったと思う。こうした観点が先行研究に欠けていたのは，単一写本のモノグラフィックな調査，もしくは女性間で継承された写本に対象を限定した子宝祈願の表象研究に主因があろう。本稿が提示する新たな見地から，今後いっそう多彩な子宝祈願の生成・受容・転成過程が考察・解明されることを期待したい。

彩飾プログラムの考察にあたっては，写本の注文主と所有主の意向をそれぞれの背景に基づいて仔細に分析する必要がある。筆者はすでにブルターニュ時祷書の調査を通じて，子孫繁栄，百年戦争の勝利，そして亡き親族の魂にたいする救済といった多様な「祈りのかたち」を詳らかにしたが，それらと照合し結節点を探るなかで，難解な作例や，一見いかなる特殊性も見出せない彩飾プログラムにさえ解読できる意味はけっして少なくないと考える[38]。もちろんそういった考察において，各写本に係わる人物の性別を看過できないことは今や疑うべくもない。

かつては書物を所有できる階層が限定的であるという理由から，写本の調査研究により得られる知見は，中世の社会や文化の総体的な姿を浮き彫りにできるものではないと見なされてきた。しかしながら，中世末期において「救済」が近親者や自己の魂の救いのみならず，対外戦争や疫病・自然災害といったあらゆる惨禍からの「解放」を意味していた事実に鑑みれば，個人的な祈念表象と解釈されてきた図像・装飾プログラムが，政治的・社会的な事象にたいする「民衆の」反応や心性の表象として新たに立ち現れてくる可能性は小さくない。このことを視野に入れた時祷書研究を今後の課題としたい。

註

＊）本稿は，西洋中世学会第 6 回大会（2014 年 6 月 21 日，同志社大学）で口頭発表した「時祷書の性別」に加筆・修正したものである。『ピエール 2 世の時祷書』にかんする筆者の研究成果については，日本フランス語フランス文学会秋季大会（2012 年 10 月 20 日，神戸大学）や国際研究集会 *En Marge*（2013 年 1 月 25 日，フランス国立ブルターニュ西大学）でも発表している。各論考については次を参照されたい――「『ピエール 2 世の時祷書』に読む祈りの表象」，『フランス語フランス文学研究』第 103 号，2013 年 8 月，255 頁；« La fonction signifiante de l'ornement marginal des livres d'heures bretons du XVe siècle », in *En Marge*, Magali Coumert et Hélène Bouget (dir.), Brest : Centre de recherche bretonne et celtique, Université de Bretagne Occidentale, coll. « Histoires des Bretagnes » (à paraître). なお本稿では主要所蔵機関を以下の略号で記す―― BnF : Bibliothèque nationale de France ; BRM : Bibliothèque de Rennes Métropole.

1）女性の「あるべき姿」を教示する時祷書として多くの先行研究の対象とされてきたのは『ジャンヌ・デヴルーの時祷書』(New York, The Metropolitan Museum of Art, The Cloisters Collection, 1954, 1. 2) である。この写本に含まれる多くのグロテスクな性表現について，マドリーヌ・キャビネスは写本の所有主となるジャンヌの「性生活の制御」を促すものとしているが，筆者はむしろ伝統的な民衆の子宝祈願の表象との類似性から検討すべきだと考えている。キャビネスの論考については次を参照―― Madeline H. Caviness, « A feminist reading of the Book of Hours of Jeanne d' Évreux », 国際美術史学会国内委員会編『美術史における日本と西洋』，中央公論美術出版，1995 年，481–515 頁（翻訳は次を参照――「ジャンヌ・デヴルーの時祷書――フェミニストの立場からの図像解釈の試み――」〔黒岩三恵訳〕，516–536 頁）。

2）*Les Heures de Pierre II* (BnF, ms. lat. 1159). この写本の基本事項については主

に次の先行研究を参照―― François DUINE, *Inventaire liturgique de l'hagiographie bretonne,* Paris : Honoré Champion, 1922, pp. 169-170 ; Victor LEROQUAIS, *Les livres d'Heures, Manuscrits de Bibliothèque nationale,* Paris : Bibliothèque nationale, 1927, t. I, pp. 75-78, pl. 51-55 ; John P. HARTHAN, *L'âge d'or des livres d'Heures, la vie et l'art au Moyen Âge révélés par les chefs-d'œuvres de l'enluminure,* traduit de l'anglais par M. DAUBIES, Bruxelles : Esevier Séquoia, 1977, pp. 117-120 ; *Arts de Bretagne : XIV-XX siècle,* Rennes : Institut culturel de Bretagne, 1990, pp. 87 et 115-116 ; *La Bretagne au temps des ducs,* Daoulas : Abbaye de Daoulas, 1991, p. 62, n° 60 ; François AVRIL et Nicole REYNAUD, *Les Manuscrits à peintures en France, 1440-1520,* Paris : Flammarion / Bibliothèque nationale, 1993, pp. 175 et 177-178 ; Michel MAUGER, *Bretagne chatoyante,* Rennes : Apogée, 2002, pp. 19, 30 et 68 ; Diane E. BOOTON, *Manuscripts, Market and the Transition to Print in Late Medieval Brittany,* Surrey : Ashgate, 2010, pp. 72-73, 92 n. 97, 135, 146-147, 159 n. 1 et 335. なお多くの彩飾フォリオは次のウェブサイトで参照可能―― http://images.bnf.fr/jsp/index.jsp

3）LEROQUAIS, *op. cit.*, p. 75. ナント使用式の時祷書として以下のものがあげられる―― Bibliothèque municipale de Nantes, ms. 21 ; BnF, ms. lat. 10534 ; Genève, Bibliothèque publique et universitaire, ms. lat. 33 ; Massachusetts, Wellesley College Library, ms. 81 WM-1 ; Moscou, Bibliothèque Lénine, ms. f. 270, IB, n° 2 ; Londres, British Library, ms. Harley, 5781 ; New York, The Pierpont Morgan Library, ms. 63 ; Oxford, Keble College, ms. 43 ; Oxford, The Bodleian Library, ms. Add. A. 185.

4）Voir *Arts de Bretagne*, *op. cit.*, pp. 115-116.

5）ピエール２世にかんする各種テキストについては次を参照―― Arthur de LA BORDERIE, « Le livre d'heures et les oraisons d'un duc de Bretagne », *Bulletin de la Société des bibliophiles bretons,* 1885-1886, pp. 66-70. いっぽう図像・装飾に認められるピエール２世の影響については，前掲の拙稿を参照されたい―― « La fonction signifiante de l'ornement marginal des livres d'heures bretons du XVe siècle » (à paraître).

6）Voir Christian de MÉRINDOL, « Nouvelles réflexions sur le rôle de l'image dans les manuscrits (XIVe-XVe siècles) », in Gaston DUCHET-SUCHAUX (dir.), *L'Iconographie : études sur les rapports entre textes et images dans l'Occident médiéval,* Paris : Le Léopard d'or, 2001, p. 282.

7）Voir Patrick BOUCHERON, « Signes et formes du pouvoir », in Jacques DALARUN (dir.), *Moyen Âge en Lumière,* Paris : Fayard, 2002, p. 197.

8）フランス王家と神との関係性を誇示する様々な図像にかんしては次の論考を参照―― Christian de MÉRINDOL, « Piété et politique dans les cours royales et princières à la fin du Moyen Âge : nouvelles lectures », in *Renaissance européenne*

et phénomènes religieux, 1450-1650, Montbrison : Association du Centre culturel de la Ville de Montbrison, 1991, pp. 235-263.

9）Lc 2, 29-32.

10）麦穂の首飾りをつけた人物像は次の写本にも認められる―― *Livre des vices et des vertus*（BnF, ms. fr. 958）; *Livre des Tournois du roi René*（BnF, ms. fr. 2695）; *Heures d'Isabelle Stuart*（BnF, ms. lat. 1369 ; BnF, ms. nal. 588）.

11）Voir MÉRINDOL, « Nouvelles réflexions sur le rôle de l'image dans les manuscrits（XIVe-XVe siècles）», *art. cité*, p. 280.

12）Voir Laurent HABLOT, « Les princesses et la devise. L'utilisation politique de l'emblématique par les femmes de pouvoir à la fin du Moyen Âge », in Emmanuelle SANTINELLI et Armel NAYT-DUBOIS（dir.）, *Femmes de pouvoir et pouvoirs de femmes dans Europe occidentale médiévale et moderne,* Valenciennes : PUV, 2009, pp. 163-183.

13）例えば『ベリー公のいとも豪華なる時祷書』（Chantilly, Musée Condé, ms. 65. fol. 4 r）にはシャルル・ドルレアンとボンヌ・ダルマニャックの婚約式の具体的な様子が描かれている。Voir Raymond CAZELLES, *Les Très Riches Heures du duc de Berry,* Lausanne-Paris : Panthéon, 1988, p. 26.

14）Voir Arthur de LA BORDERIE, *Histoire de Bretagne,* Rennes : Librairie générale de J. Plihon et L. Hommay, 1972, p. 393.

15）歴代ブルターニュ公の尽力の末，同年に列聖された聖ヴィンセンテ・フェレルへの言及が「諸聖人への執り成しの祈祷」（fol. 128 v）に認められることから，ピエール２世が逝去する 1457 年までの２年間に彼の写本が制作されたと考えられている。Voir *La Bretagne au temps des ducs, op. cit.*, p. 62.

16）フランソワはマルグリット・ドルレアンとリシャール・デタンプの子息。この夫婦の子宝祈願については次の拙稿を参照――「時祷書の語り――マルグリット・ドルレアンの子宝祈願をめぐって――」,『ステラ』第 32 号，九州大学フランス語フランス文学研究会，2013 年 12 月，137-152 頁。

17）ドゥヴィーズの考証によって余白装飾の一部をなす人物像の同定に至りうる例は『マルグリット・ドルレアンの時祷書』（BnF，ms. lat. 1156 B）にも認められる。これに関連する研究成果については，国際シンポジウム Empresas-Devises-Badges（2014 年 9 月 18 日-20 日，バターリャ修道院）で報告している（研究発表論集は刊行予定）。なお，ロラン・アブロ氏がフランス国立ポワチエ大学のウェブサイトで構築中のドゥヴィーズのデータベースには，ブルターニュ公家のものも一部公開されている―― http://base-devise.edel.univ-poitiers.fr/index.php

18）Lc 1, 32-3

19）彼女への暗示としては，誕生日の記載（fol. 173）と，「諸聖人への執り成しの祈祷」に彼女が崇敬した「聖ウルスラ」（fol. 168 v）と「11,000 人の処女」（fol. 169 v）への言及が認められるにすぎない。

20）Voir MÉRINDOL, « Nouvelles réflexions sur le rôle de l'image dans les manuscrits (XIVe-XVe siècles) », *art. cité*, p. 284.

21）純白の衣を纏ったマリアは，15 世紀の図像に多大な影響を与えた聖ビルギッタの幻視に現われるうえ，同世紀後半には「無原罪のお宿り」の表象として「エッサイの木」の一部をなす作例も見られるようになる。しかしながら 15 世紀半ばに制作されたブルターニュ時祷書において，聖母マリアが青の衣装を纏った姿で表象された例に鑑みれば，『ピエール 2 世の時祷書』の特異性を指摘せざるをえない。なおマリアの衣装が 12 世紀後半以降青色で描かれるようになった経緯については，Voir Michel PASTOUREAU, *Bleu. Histoire d'une couleur,* Paris : Éd. du Seuil, 2002, p. 44. 翻訳は次を参照――ミシェル・パストゥロー『青の歴史』（松村恵理・松村剛訳），筑摩書房，2005 年。

22）JACQUES DE VORAGINE, *La Légende dorée,* traduit par J.-B M. ROZE, Paris : Flammarion, 1967, t. I, pp. 331-332.

23）「執り成しの祈祷」が捧げられている処女聖人は次のとおり――「聖カタリナ」（fol. 153 v）；「聖マルガリタ」（fol. 154 v）；「聖バルバラ」（fol. 166 v）；「聖ウルスラ」（fol. 168 v）；「11,000 人の処女たち」（fol. 169 v）。

24）他の「聖アポロニア」の図像に同様の傾向が認められないことは，次のブルターニュ時祷書に確認できる――『フランソワ 2 世の時祷書』（Bibliothèque municipale de Nantes, ms. 21, fol. 176）;『フランソワーズ・ド・ディナンの時祷書』（BRM, ms. 34, fol. 80）;『ジャン・ド・モントーバンの時祷書』（BRM, ms. 1834, fol. 108）。

25）New York, The Metropolitan Museum of Art, The Cloisters Collection, 1954, 1.1. 15 世紀初頭にフランス王弟ベリー公がランブール兄弟に制作させたこの写本については次を参照―― Hélène GROULLEMUND et Pascal TORRES (dir.), *Les Belles Heures du duc de Berry,* Paris : Louvre éd, 2012. なお当該写本のブルターニュ時祷書における影響については，前掲拙稿「時祷書の語り」143 頁を参照されたい。

26）Émile MÂLE, *L'art religieux de la fin du Moyen Âge,* Paris : Armand colin, 1908, p. 328. 翻訳は次を参照――エミール・マール『中世末期の図像学』（下）（田中仁彦・他訳），図書刊行会，2000 年，52 頁。

27）「隠修士パウロの生涯」の冒頭に挿入されているこの図像（fol. 191）については次を参照――木島俊介『美しき時祷書の世界――ヨーロッパ中世の四季』，中央公論社，1995 年，40 頁。

28）Voir Albert LE GRAND, *Les vies des saints de la Bretagne Armorique,* Quimper : J. Salaün, 1901, p. 413.

29）「聖母マリアの時祷」に同様のマリアの姿が認められる図像は次のとおり――朝課「受胎告知」（fol. 32）；賛課「エリザベト訪問」（fol. 41）；1 時課「キリスト降誕」（fol. 52）；6 時課「マギの礼拝」（fol. 61 v）；9 時課「神殿奉献」（fol. 65 v）；晩課「エジプトへの逃避」（fol. 69 v）；終課「聖母戴冠」（fol. 74 v）。写本所有主の祈祷像は通常聖母マリアへの祈祷文 « Obsecro te »，もしくは「聖母マリアの時祷」の朝課冒

頭に認められるが，後者の作例がより多いことが指摘されている。Voir HARTHAN, *op. cit.*, pp. 24-25.

30）石井美樹子『聖母マリアの謎』，白水社，1988 年，60 頁。

31）Voir LA BORDERIE, « Le livre d'heures et les oraisons d'un duc de Bretagne », *op. cit.*, pp. 70-71. ただし，彼女の蔵書印の下には，この写本が夫ジャック・ド・フォワシィの所有物であることを記した形跡が科学的調査によって確認されている（voir Marie-Françoise DAMONGEOT-BOURDAT, « Le Coffre aux livres de Marie de Bretagne（1424-1477）, abbesse de Fontevraud », in Anne-Marie LEGARÉ（éd.）, *Livres et lectures de femmes en Europe entre Moyen Âge et Renaissance*, Turnhout : Brepols, 2007, p. 99）。

32）Voir DAMONGEOT-BOURDAT, *ibid.*, pp. 85-87 et 95.

33）なお，「聖ウルスラ」（fol. 168 v）の欄外に認められる盾形の紋章には白貂の毛皮模様が 8 しか認められない。この紋章がピエール 2 世はもとよりフランソワ 2 世にも使用されていたことを踏まえれば，写本後継者の可能性をマルグリットの夫である後者にも求めることもできよう。ただし 15 世紀半ばにフランソワ 2 世が注文・所有したと考えられる 2 冊の時祷書（Bibliothèque municipale de Nantes, ms. 21 ; BnF, ms. lat. 10548）には，いずれも聖ウルスラへの特別な崇敬は表明されていないため，彼自身の意向でこの紋章が挿入されたとは考えがたい。フランソワ 2 世の蔵書については次を参照―― BOOTON, *op. cit.*, pp. 278-280.

34）マルグリット・ド・ブルターニュの蔵書については次を参照―― Jean-Luc DEUFFIC, *Notes de bibliologie : Livres d'heures et manuscrits du Moyen Âge identifiés (XIVe-XVIe siècles)*, Turnhout : Brepols, 2009, pp. 167-170.

35）*Les Heures de Fitzwilliam*（Cambridge, Fitzwilliam Museum, ms. 62）. この写本はヨランド・ダラゴン（1381–1442）が彼女自身のために 1417 年ごろ注文したものとも，1431 年にフランソワ 1 世と結婚した娘のヨランド・ダンジュー（1412–1440）のために注文したものとも考えられている。いずれにせよ祈祷文が女性形で記されているうえ，巻末には寡婦の姿が認められるため，1417 年に夫ルイ 2 世を亡くしていたヨランド・ダラゴンと当該時祷書との関連性は明らかである。いっぽう，この時祷書に描かれたフランソワ 1 世の後妻イザベル・スチュアートの紋章や彼女の娘マルグリットの祈念姿は，いずれも写本の継承過程で付加されたものである―― Voir Elizabeth L'ESTRANGE, « Images de maternité dans deux livres d'heures appartenant aux duchesses de Bretagne », in Anne-Marie LEGARÉ（éd.）, *Livres et lectures de femmes en Europe entre Moyen Âge et Renaissance*, *op. cit.*, pp. 36-43. なお，マルグリットの蔵書目録には義母マルグリット・ドルレアンの時祷書（BnF, ms. lat. 1156 B）も記されているが，これについては後者が 1466 年に逝去した際に前者に贈られた可能性が高いため，『ピエール 2 世の時祷書』との影響関係を問う必要はなかろう。

36）紋章の配置から写本所有主の聖人崇敬のかたちが浮き彫りになるブルターニュ時祷

書の作例については拙論を参照されたい―― *La signification et la fonction symbolique de l'ornement végétal dans les livres d'heures bretons au XVe siècle,* thèse de doctorat, Université Paris X, 2008, t. I, pp. 267-268.

37）写本所有主の性別によって子宝祈願の表象が異なることは，次の 2 写本間の差異にも見出せる。ジャン・ガレアッツォ・ヴィスコンティが注文・所有した『ヴィスコンティの時祷書』（Florence, Bibliothèque nationale, BR. 397）では，ヨアキムとアンナの図像に長らく子宝に恵まれなかったヴィスコンティ夫妻が重ねあわされている。いっぽう，この写本の影響が指摘されている『ジャン・ド・モントーバンとアンヌ・ド・ケランレイの時祷書』（BnF, ms. lat. 18026）では，聖アンナにのみ同様のアマルガムがあるため，妻アンヌの祈祷書として制作されたと筆者は推測している。夫ジャンが注文・所有した写本（BRM, ms. 1834）との比較検討から同様の見解を導きうることは，前掲拙稿「時祷書の語り」151 頁で言及した。なお，上記 2 写本にかんしては次を参照されたい―― Millard Meiss, *Les Heures de Visconti*, traduit de l'américain par F. Avril, Montrouge / Paris : Draeger frères / Vilo, 1972 ; Avril et Raynaud, *op. cit.*, pp. 176-177.

38）『イザベル・ド・ブルターニュの時祷書』（Lisbon, Museu Calouste Gulbenkian, LA 237）は，ジャンヌ・ド・フランス（1391–1433）のために 1420 年ごろ制作されたものとも，彼女の娘イザベル（1411–1442）が 1430 年に婚姻した際に注文されたものとも推測されてきた。いっぽう筆者は，当該写本の図像プログラムを母から娘へと継承・贈与された複数のブルターニュ時祷書に照らし合わせ，両者間に明らかな差異を見出している。たしかにイザベル夫妻に関連する図像が散見するうえ，ジル・ド・レが悪事の果てに捕らえられ，1440 年に死に至る経緯を辿る図像サイクル（fol. 202 v）が認められる点から，先行研究の見解に問題があることが窺い知れる。今後さらに考察を深化させる必要があるものの，同写本にかんする資料や情報をいただいたグルベンキアン美術館グラフィックアート部門のジョアン・カルヴァーリョ・ディアス氏と，ポルトガルでの調査研究を助成して下さった公益財団法人鹿島美術財団に篤くお礼申し上げる。なお海外派遣の報告書は次を参照されたい――「異文化教育における彩飾写本の可能性――研究と教育の〈共生〉をもとめて――」『鹿島美術研究』年報 32 号別冊，2015 年 11 月刊行予定。